



〈前編〉

私が見た貧困とエイズ

こんにちは。皆さんの地域でも、そろそろ春の気配が感じられる頃でしょうか。今回と5月号でこのコーナーを担当します、AMDA(特定非営利活動法人アムダ)登録看護師の工藤ちひろです。私の海外での経験やそのとき感じたことなどを綴っていきますので、勉強の合間にもお付き合いいただけると嬉しいです。

マラウイで見た“貧困”

皆さんは臨床検査技師の業務をご存知でしょうか。病院や検査センターで血液の検査をしたり、心電図をとったりする仕事です。私の国際医療援助活動の第一歩は、検査技師として青年海外協力隊に参加することから始まりました。

派遣地は東アフリカのマラウイ共和国です。国土面積は日本の約1/3の小さな内陸国で、たばこや茶など農業を産業の中心としていますが、世界最貧国の一つに数えられる国です。マラウイでは、日本でよくみられる生活習慣病はさほど多くなく、マラリア、肺炎、結核、エイズ(HIV)などの感染性疾患がほとんどです。特にHIVの感染率

は全人口の10%を超えるといわれています。私が活動していた1992年当時は、まだHIVの抗ウイルス薬がマラウイ国内では手に入らない状況でした。病院には、日和見感染症を併発した30人以上のエイズ患者さんが常時入院していましたが、対症療法を施すしかなく、周囲の村にはその何十倍もの人数の患者さんが在宅で療養生活を送っていました。

農耕で生活しているマラウイの人達には、“困ったときにはお互いに助け合う”という文化があります。しかし、旱魃による不作も重なり、村には増え続けるエイズ患者さんを支える余力はなくなっていました。荒れた畑の中の雨漏りがひどい小屋の前で、「親族にも見捨てられ、カボチャの葉しか食べていなくて下痢がひどい、おなかですいた」と表情を失ったしわしわの顔でぼそぼそと訴える女性を前に、私はかける言葉を失ってしまいました。“貧困”という、もう一つの大きな問題が立ちだかっていました。患者さんたちは今後の病状など未来のことより、とまかく今日の食事のことを心配しなければならないのです。

エイズの残酷さを目の当たりに

マラウイではエイズはとても身近な問題で、私が出た2年の間にも一緒に働いていた看護職員と看護学生がエイズを発症して亡くなっています。看護職員にはまだ幼い子どもがいたのですが、彼女が体調を崩して入院し、原因がエイズだとわかると、彼女の夫はアルコールに逃避して、見舞いにも来ずに昼夜の別なく酔っ払い、ついには失踪



コーディネーター **菅波 茂**

1946年広島県生まれ。医師・博士(公衆衛生学)。1984年AMDA(特定非営利活動法人アムダ)を設立。アジアを中心とする医師のネットワークを活用して医療チームを編成し、これまでに難民や災害被災者への救援活動を50か国、120件実施。「日本の看護師は世界中どこに出しても恥ずかしくない」が持論。医療法人アスカ国際クリニックで診療を続ける傍ら、AMDA代表を務める。

ナースたち

1人目のナース

AMDA登録看護師
くどう
工藤ちひろ



profile

1992年から2年間、臨床検査技師として青年海外協力隊に参加し、マラウイ共和国へ。帰国後、看護学校へ通い、看護師資格を取得。その後、看護師として国内の病院に勤務した後、2001年から2年間、AMDAの活動でパキスタンへ。2004年にはMSF(国境なき医師団)に参加し、スーダンへ。2005年にパキスタン地震災害救援活動(2週間)、2009年にインドネシア地震災害救援活動(2週間)にそれぞれ参加した。



消毒用の綿を作るマラウイの看護学生たちです。



← 学校の子どもたちによるエイズ予防の劇。男の子が女の子をナンパしているシーンです。

してしまいました。幼い子どもは彼女といちばん仲良かった看護職員が引きとって育てることになりましたが、幸せいっぱいだった家庭はエイズにより崩壊してしまったのです。また、看護学生はまだ10歳代の女の子でした。寮生活をしながら勉強し、あと1年で卒業というときの発症でした。彼女が療養のため学校を休学して家へ帰る日、「元気になって戻ってきてね」と皆で見送ったのですが、数か月後に家で息をひきとったと聞きました。

“診断はできても治療がない”——エイズはそんな残酷な現実を私たち医療者に突きつけていました。

一念発起して看護師に！

1994年にマラウイから帰国後、私は看護師の資格を取ることにしました。

検査業務は検体を相手にすることが多いのですが、マラウイでの経験をとおして、直接人に接し患者さんの生活にかかわることのできる看護の仕

劇中、HIVに感染した男の子が死んでしまうシーンです。



事をしてみたい、と思うようになったからです。

年下の同級生たちと一緒に看護学校に通い、授業が終わるとアルバイトにも精を出して生活費を稼いでいました。ただ、実習期間中は課題が多かったためアルバイトどころではなく、学友たちと課題を分担したり、こっそり先輩方からもらった資料をコピーしたりと、今思い出すと懐かしく感じられもするのですが、その当時は大変でした。

なんとか看護師の資格を取ってから、東京都内の救命救急センターで3年間働き、看護師としての技術を身につけました。そして、念願だった国際協力の現場に再度赴くために退職し、AMDA登録看護師になりました。

今回は、AMDAパキスタンの活動についてお話ししますね。

(5月号に続く)